

	ご意見	修正案（意見者）	回答（事務局）	修正方法
■パブリックコメント				
	ベクトルデータの規格としてシェープファイルが採用されていますが、シェープファイルはトポロジーを持たず、また、データベースのフィールド名が半角英数10文字分と少なく、適切ではないと思います。GeoJSONもしくはTopojsonを採用すべきと思いますがいかがでしょうか？シェープを採用する場合は、その採用理由や他の規格よりも優れている点を仕様書に書いてほしいです。	GeoJSONまたはTopojsonに変更する。	●シェープファイル採用理由 シェープファイル（Shapefile format）は、地理情報システム（GIS）間でのデータの相互運用におけるオープン標準として用いられるファイル形式である。 ●他の規格よりも優れている点 比較優位点は特になし。	標準仕様で扱うファイル形式は、地理情報システム（GIS）間におけるデータ相互運用において標準フォーマットとして用いられ、多くのGISソフトウェアで利用が可能であるシェープファイル（Shapefile）を採用する。
	森林外も含まれているので、名称を「土地被覆ポリゴン」としてはどうか。土地被覆ポリゴンから森林部分のみを抽出したデータを「樹種ポリゴン」と称した方が分かりやすい。		土地被覆という概念が分かりにくいいため、名称は「樹種ポリゴン」のまま、留意点として森林外の区分も含むことを記載した。	p. 5、13、14 説明を追記
■委員会からのご意見				
凡例・用語の標準化	「何とかデータ」、「何とかポリゴン」など、各データを何のために使うかという目的を明確に記載する。			p. 5、6 説明を追記
	ポリゴンは面的に色分けする、ポイントは範囲を指定して集計するなど、具体的な視点を記述された方が良い。			
	一個一個の専門用語（固有名詞）が長いので、もう少し分かりやすく変えた方が良い。		現状のままとする。	
	森林資源集計ポリゴンと解析範囲ポリゴンを分ける必要はあるのか。		解析範囲ポリゴンのほうには業者名など、DSMとDTMを分けた解析範囲のデータソースのより詳しい情報を持たせている。	
	計測データと集計データというのが分かりづらい。計測データというのは、複数の計測が独立したもののまとまりなので、1つの場所にレイヤがたくさんあっても構わないが、集計データに関しては、それを取りまとめて1つとしていることが分かるようにする。			p. 5～8 説明を追記
	計測範囲ポリゴンと単木ポイントの位置がずれているなど、図のデータイメージが湧きにくい。		R3年度の検討課題とする。	
使い方その他に関しては参考文献等を紹介するという形でも良い。		R3年度の検討課題とする。		
データ	精度が異なるデータをどう重ね合わせていくかというところが見えてこない。何であれば森林資源集計データに採用されるのか、その辺りの明確な定義が必要。		R3年度の検討課題とする。	p. 8 説明を追記
	「複数ある場合は新しいほうを採用」と書いてあるが、これは自動的に新しい方を採用するということか。		基本的に新しいデータを採用すると考える。	
樹種ポリゴン	樹種ポリゴンの定義に樹種内の細分は行わないとあるが、どういうことか。		樹種ポリゴンは林相ではないという意味。	p. 13 訂正：同一樹種内の樹高等による区分は含まない。
	林相ではなく樹種で分けるというのは、森林簿を見ると、同じ樹種でもポリゴンが2つあると思うのだが、それを分けなくて1つの大きなポリゴンにしたものを樹種ポリゴンという、ということか。		林相区分は標準化が困難であるという結論に至り、標準仕様で定義するのは樹種だけとした。仕様書p31のその他の資源量集計ポリゴンとして林相界を作成していただくことは可能。	p. 7 説明を追記
	林相区分という形で発注したのですが、実際には樹種区分のような内容の仕様になっていたことがあった。			
	「単木ポイントへの樹種の付与」という用途が書いてあるのですが、これは樹種ポリゴンなのになぜ単木ポイントの話が出てくるのか。		単木データは人工林樹種が対象であり、樹種ポリゴンの対象樹種内のみ単木ポイントを解析している。	
	「細分の判読」が意味していることが、この文章からでは分からなかった。		75%以上スギであればスギにするという意味。	
	解析樹種のポリゴンのIDのままだと、例えば岩石地や崩壊地も「その他」になってしまう。家や川も「その他」に入ってくるため、細分された方が良い。		細分の判読精度は様々なため、標準仕様で定めることは困難と考えている。自由に区分できる「樹種」を活用できる。	p. 5、14 説明を追記
	崩壊地、風倒といった、目に見えて分かるようなものは属性として良い。「その他」というところの区分の分け方が広過ぎると思う。			
	50番台は森林、70番台は人工物関係など、IDの付け方を工夫した方が良い。		既存の標準仕様のIDにならっている。	
	樹種コードが1番から連番だが、例えば1桁は針葉樹、11番からは広葉樹などした方が良い。			
エンドユーザーの方々の声を反映するのは非常に重要だが、どこかのタイミングで線を引いて、ルールメーカーになり得る林野庁の方々、この事業に参画している方々で、どこかの割り切りは必要。				

	ご意見	修正案（意見者）	回答（事務局）	修正方法	
精度検証	誤差率が良いか。本数は率が良いが、樹高や直径は率ではなく実際の誤差そのものではないか。		誤差と誤差率を併記する。	p.36 訂正：誤差率（符号付）を誤差に変更。	
	真値に対する許容できる誤差ということになるのではないか。				
	現場で働く場合、使用する場合は誤差で、センチ、長さを採用していただけるとありがたい。その中で、収量比数と相対幹距比を基本とすることであればなおのこと、誤差率よりも長さを誤差を表示されると、解析するときの間伐の優先順位、優先度をはかる収量比数や相対幹距比を出すときも一定程度以上の精度が出てくると考えている。				
	誤差、誤差率の両方併記でいいのではないか。				
	現地調査で測った材積との比較というところまで触れたほうが良いのではないか。今はいろいろな推定式で直径まで推定している事例があるが、そういったものも含めて掲載はしてもいいのかと考える。				
	行政の方々にとっては、データの精度がどの程度あるのかということも重要な点であり、どういったデータが欲しいのか都道府県の意見を聞いて来年度反映させるということが重要。				
	精度検証のデータを将来的にオープンデータ、ビッグデータで調査研究等に活用できるデータとして整備するというのがあるが、その上で、調査とか研究に活用するならば、本当は野帳のデータが欲しい。将来的には元データもここに入っている形になるとありがたい。			R3年度の検討課題とする。	

■仕様書修正点

訂正前 Ver.1 令和3年3月	-	-	訂正 Ver.1.1 令和3年6月
	-	-	改訂履歴追加 Ver.1 令和3（2021）年3月 初版 HP掲載（パブリックコメント募集） Ver.1.1 令和3（2021）年6月 ・森林GISフォーラム標準仕様分科会にて「仕様書案」が承認され発行 ・初版文章校正 ・森林資源量集計ポリゴン『キ』立木密度』の桁数の見直し修正（修正前：4桁、修正後：5桁）
句読点、フォント、書式等の修正	-	-	全体的な見直し校正
訂正前 森林資源量集計データ	-	-	訂正 森林資源量集計データ
訂正前 レーザ二	-	-	訂正 レーザ
地形測密度と森林測密度の点数、照射密度は、テキストではなくて数値のほうが良い。 計測密度属性は数値型が、型変換なしで計算に用いることができている。 計測密度は整数ではなく、実数の方が良いのでは。 Integerに変更しても差し支えない。	数値型に変更する。 TEXT→Integer	地形測密度と森林測密度は、属性定義を決める際に3社様よりご提供いただいた属性定義に基づき“Text”とした箇所だが、計算に用いることを考慮しご意見を反映して、“text”ではなく“数値”に変更する。	形式：Integer 全桁数：8
訂正前 エ）樹種 内容：（解析樹種IDの項を参照）	-	-	訂正 エ）樹種 内容：（樹種IDの項を参照）
訂正前 属性項目 シ）～ニ）の連番	-	-	訂正 属性項目 ア）～サ）の連番
訂正前 利用上の問題が無いようポリゴンごとに森林計測年、森林計測法を付与することを…	-	-	訂正 利用上の問題が無いようポリゴンごとに森林計測年、森林計測法を付与することを…
訂正前 キ）立木密度 全桁数 4	森林クラウドシステム標準仕様と桁数を合わせる。	-	訂正 キ）立木密度 全桁数 5
訂正前 解析データの精度は、解析データ値と現地調査値の誤差率を算出し精度情報として提供する。	-	-	訂正 解析データの精度情報は、解析データ値と現地調査値の誤差率を算出し、精度検証報告として提供する。
訂正前 表中メタデータの項目の分類番号 4.1.1～4.1.5の連番	-	-	訂正 表中メタデータの項目の分類番号 5.1.1～5.1.5の連番
訂正前 <datatype>は…003:改訂日はいずれかの数字を…	-	-	訂正 <datatype>は…003:改訂日 <u>0</u> いずれかの数字を…
訂正前 サ）森林業務名 備考 林相データを整備した…	-	-	訂正 サ）森林業務名 備考 森林資源量データを整備した…
訂正前 森林測密度 仕様上4点/m ² の場合、仕様を完全に満たすため照射密度は10点近くになっている場合が多い。	-	-	訂正 森林測密度 仕様上4点/m ² の場合、仕様を完全に満たすために照射密度は10点近くになっている場合が多い。